Ｎｏ．２８９【２０１８年１月１２日配信】
幸田露伴『突貫紀行』に描かれた青森　その２（担当：鈴木）

あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

さて、今回は幸田露伴著『突貫紀行』(2017 年 12 月 1 日配信 No.284) の後半をお伝えします。露伴は青森市域を出て小湊(現平内町)まで来てしまいましたが、もう少々おつきあいください。

明治 20 年（1887）8 月 25 日、突貫して逆境を脱しようと北海道の余市を出奔した満 20 歳の露伴は、船で青森に渡り、そこから徒歩で東京の自宅を目指します。

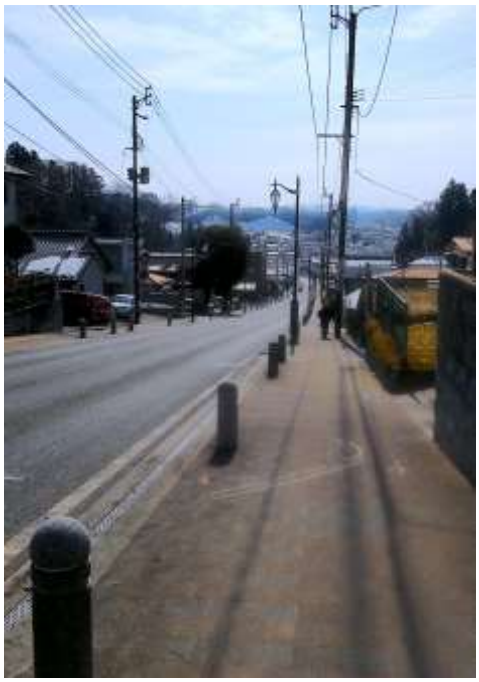
小湊を出立した露伴は、清水川を経て海沿いに歩き、野辺地まで来ました。野辺地の町では、本町(ほんまち)通りの 300～400 メートルほどに御影石が敷かれている様子に感心しています。これは、野辺地港に入る北前交易の船が、積荷が軽くて船のバランスが取れない場合にバラストとして船底に積んできた石なのだそうです。現在は、その一部が桜の景勝地として知られる愛宕公園の石段に使われています。

野辺地町の愛宕公園

露伴はさらに歩を進めます。ところが野辺地で昼食に出されたキノコにあたって腹痛を起こし、その後も雨に降られ、足のマメが潰れて苦しみます。また、玉子を安く買えたと喜んで、いざ昼食に食べようと口に割り入れたら腐っていたなど災難続き。泣きたい気持ちで、やっと盛岡までたどり着きます。盛岡では「久しぶりにて女子らしき女子をみる」「兎も角も青森よりは遙によろし」いと言っていますので、どうも青森県の印象は良くなかったようです。

盛岡からは足の痛みで歩けず人力車で一関まで行き、そこから船で北上川を下りました。この船旅は快適だったようで、餅売りの少女をからかう余裕が出てきます。石巻で船を下りましたが、所持金も少なく、こういう時こそ修行だと足の痛みに堪えて徒歩で松島に向い、絶景を楽しみます。その後、仙台に出て数日滞在、ようやく知人から少しの金と馬車券を得ることができ、頭痛を抱えながら乗合馬車で福島へ向かいました。

福島に着くと、この年の 7 月に日本鉄道（のちの東北本線）の郡山駅が開業し東京まで鉄道で帰れることを知りますが、もう金はその運賃分しか残っておらず、やむなく腹をすかせ、足をひきずりながら徒歩で郡山へと向かいます。夜を徹して歩き、ようやく翌 9 月 29 日の朝に郡山から蒸気機関車に乗り、なんとか東京の自宅に帰り着いたのでした。



露伴が通った亀谷坂
（福島県二本松市）

亀谷坂にある幸田露伴句碑

ちなみに、この郡山駅は昨年開業 130 年を迎え、そして明治 24 年 9 月 1 日開業の青森駅は 2021 年で 130 年になります。東京・青森間の鉄道は、明治 15 年の着工から 9 年余りをかけてつながりましたが、明治 20 年に東京を目指した露伴の行程は、約半分が徒歩、半分が鉄道と、「歩く旅」から「乗る旅」へと変わっていく時代だったのですね。

初代青森駅
（『目でみる青森市の歴史』より）